みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

三江県の「六甲人」に関する覚書：その歴史・文化と民族意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008641

塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』
国立民族学博物館調査報告　142:293–307(2017)

三江県の「六甲人」に関する覚書
――その歴史・文化と民族意識

塚田　誠之
国立民族学博物館

1　はじめに

中国には多くの民族集団が居住する。人々が自らの集団を維持する上で歴史や文化を資源として活用する場合が少なからず見受けられる。本稿では，広西壮族自治区三江侗族自治県に居住する「六甲人」という集団を事例として，歴史文化が集団の維持に果たしている役割について検討する。六甲人は現在は漢族に属し，三江県における人口は約10数万人ほどといわれる。費孝通によると，六甲人は，少数民族地区に移住した漢人のうち早期移民が長期間内地と隔絶し，後来漢人と言語・風俗習慣において一定の区別があり，なおかつ後来漢人から差別を受けたため，自ら当地の漢人と差異があることを認め，「解放」後に少数民族と承認されることを要求した［費 1980］。黄光学（主編）［1995］によると，清代の行政区域である 6 つの甲にちなみ，（県庁所在地である）古宜（鎮）周辺に居住し人口22,000人（1953），祖先が福建汀州上杭県から来住し漢語系統の言語を持つこと，風俗は現地のトン族と異なる点が多いこと，漢人から差別され蔑称があったことにふれ，言語・歴史から見て漢族に属するものの，来住後，長期間侗（トン）族，壮（チワン）族と接触しその影響を受けた集団であるという。唐志宗［1986］によると，古宜鎮の大寨村を中心に縦横 5 キロメートルほどの範囲内に 3 万人の六甲人が居住し，漢族を含む他民族とは異なる「共同の言語，共同の習俗，共同の経済生活，共同の心理状態を有する」集団だという。

「六甲人」は古宜鎮付近の沿河地域に集中して居住している。しかし，一部は非漢族地域に移住し，非漢族になったものも見られる。たとえば侗族地域では侗族に，壮族地域では壮族になっている。大多数のものは漢族である。六甲人について，唐［1986］以外には従来，研究が少なく，かつ唐［1986］の研究についても範囲が限られたものであった。その習俗のどの部分に侗族，壮族の影響を受けたのか，また，それら民族の影響を受けながらどのようにその独自性を保持し得たのか，そうとすればそれはいかなる要因によるものか等々，不明な部分が検討課題として多々残されてきた。元よりこの点に関する調査は十分ではないが，従来の研究や筆者の調査をもとに六甲人の歴史・文化について検討を試み，そうした歴史・文化を資源として活用している彼らの民族意識のあり

ように迫りたい[1)]。

2 移住史

2.1 来歴に関する諸説

六甲人には「十二大姓」（曹・侯・栄・李・龍・藍・龔・謝・欧・楊・潘・馬）とそれら以外の姓を含む31姓もの姓がある。「十二姓」のうち曹・侯・栄姓が最も多い。唐［1986］によると，六甲人「十二大姓」の来歴には2種の伝承がある。一つは，宋徽宗大観元年（1107）に金軍の戦乱から逃れ，各姓の始祖が男女4千人を率いて，福建汀州府上杭県珠璣巷から広東嘉応州を経て広西柳州へ至り，そして古宜へ来た。もう一つの伝承は，唐朝末に黄巣が蜂起した際に，十二大姓は福建汀州府上杭県から逃げて広東嘉応州に行き，そこにしばし留まり，さらに柳州，融水へ来た。融水でも暫し留まり，後に古宜へ来た[2)]。前者については，民国22年（1933）に栄成基・栄冠英・曹駿庭等人が建立したという碑「開基始祖曹栄龍李欧陽潘馬藍龔侯謝十二大姓発源紀念碑」の銘文に刻まれており，その碑は現在，古宜鎮大寨村曹家祠堂内にある。

民国（1946）『三江県志』2社会，民族「六甲人」でも，基本的に唐［1986］の前者の説と同様の由来が記されている。しかし，故地を離れて古宜に定住した時期が不明である。この点について，民国『三江県志』2社会，民族「六甲人」によると，「歴元及明，史称其為民，以与夷別。明洪武中，立県治於老堡，置鎮甲冬峒。而有三甲民之称，蓋当時之甲次也。其所居地為三峒六甲，而結集於六甲者為多，故又称為六甲人」とあり，すでに元代以前に老堡に定住しており，明代洪武年代に（老堡の地に懐遠）県治を設置し「三甲」民という呼び名が生じたこと，地方志の編者の見解としてとくに「六甲」に集中して居住した故，六甲人といわれるようになったことが示されている[3)]。

侯井榕［2003］は，遺伝子の分析から，長江中下流域に起源し，屯墾・戦事ゆえに従軍したり，官員に従って移住したこと，六甲人といっても，たとえ同姓でも同源ではないこと，遺伝子・族譜から福建・湖南から移住したことを指摘している。

黄（主編）［1995］は，清代の行政区域の6つの甲に住んでいたゆえ六甲人と言われたという。唐［1986］は，一歩掘り下げて，六甲人の聚居する主要な地区は清代乾隆年間に6甲（曹栄甲，程村甲，黄土甲，古泥（宜）甲，文村甲，寨准甲）に区分されたこと，そしてこの6甲内に居住する人（基本的に他民族が雑居していない）を六甲人と称する。したがって「六甲」という呼称はこの地域が行政的に6甲に区分された乾隆年間に生じたと推定している。そうとすれば，先述のように元・明代にすでに六甲人という総称は存したが，具体的な甲名は清代に明確になったように推測される。

姓ごとの移住について，たとえば曹姓について『曹氏宗志』（2011）によると，初代曹槐公は，原籍が河南省南陽中州であったが，北宋嘉佑年間に総兵官に任命されて福建

に赴任し，任期が終わった後，福建省上杭県東門街珠璣巷に住んだという。第三代簡台公は湖北鄂州，柳州，融県に任官し，その後融県水東街に住んだ。そして第五代大禧公が正隆年間（1157年頃）に懐遠（今の老堡）に来て，南宋淳熙年間（1180年頃）には現在の冷曹上寨に来たという。このときに12姓の衆人を率いてきたという。さらに三江県民委（編）［1989］によると，唐姓について，「下村唐氏族譜」によると，祖先は山西晋陽人で，五代の時に湖南零陵へ行き，また福建に行った。最終的には明代に三江に来て定住したという[4)]。加えて斗江（鎮）梁姓について，その祖先は湖南靖州会同から広西の慶遠河池州へと移住し，その地に居留した後，400年近く前に古宜斗江に移住した［三江県民委（編）1989］。

以上から，六甲人は福建や湖南等から，柳州，現在の融水を経て，少なくとも明代以前に古宜や旧三江県治たる懐遠県に来住し，明代から遅くとも清代乾隆年間までには「六甲人」と称されるようになったこと，斗江梁姓をはじめ姓による移住の経路や時期に多少の違いがみられることが指摘されよう。

2.2　言語

唐［1986］によると，六甲話は，麻介（客家）白話（粤語）と融水一帯の「土拐話」の中間にあるという。従って，十二大姓が移住の途中で広東嘉応州，広西融水に居留したことは自然である。土拐話について，曹姓の「百姓人」が今も融水に居住してその言語を話すという。この点について民国『三江県志』２社会，民族では（六甲話は）「融県の百姓話および粤語と相い類似している」としている。侯井榕［2003］によると，漢語の方言は宋代にすでに形成されたが，六甲人の先民もこのときすでに柳州に達していた。そして三江と融水（融州）が別々の県として政治的に分けられた後に往来が少なくなり現在の六甲語になったという。侯は，融州で「土拐人」と接触して言語的に「同化融合」したことを指摘している。民国『三江県志』２民族「方言」では，その言語が粤語や官語に近いこと，六甲人の大部分が官語に通じるので，漢人に対して距離を置く心配がないこと，融属の百姓話とほぼ同じであることを挙げている。百姓話は漢語の方言の一種「平話」に属する。六甲人自身の認識としては「百姓語」と大同小異だが同じではない（1990年５月の古宜鎮大寨屯調査）といい，また，むしろ白話により近いこと，「百姓語」とは口音・呼称のうえで異なるという（1990年６月２日，唐志宗氏への聞き取りによる）[5)]。

唐［1986］は六甲語の「独立性の強さ」，人々の自言語に対する執着心の強さを指摘している。離郷して何年経っても帰省すれば六甲語を使用すること，またその女性に顕著な現象だが，別の人と話すときに相手が六甲語を解さなくとも六甲語を話す（ただし交易に際して意味が通じなければ，そこで普通漢語を話し始める）という。もと古宜区では，郷幹部会や代表会議の際に六甲語で発言がなされたともいう。また，後述するよ

うに他族との婚姻はかつては少なかったが，六甲人の女性が漢人と結婚した場合でも夫婦間や家庭では六甲話を話したという言説がある。このように，人口的に少なく弱小集団ながらも自言語に対する執着の強さは注意すべきである[6)]。なお，六甲人・麻界人（客家）・普通漢人は長期間，侗，苗，瑤，壮等の民族と頻繁に交流してきたため多くの人は数種の言語を話すことができる[7)]。相互の通婚関係で斗江・古宜・丹洲等では数種の言語を操ることができる。黄（主編）［1995］によると自称は「客人」である。この点，唐［1986］によると，自称は「客人」であるが他の漢人を「軍」と呼ぶという。「軍」とは，黄（主編）［1995］によると，六甲語で「官」を指す。

2.3 「六甲人」の拡大

民国『三江県志』では六甲人は「十二姓のみ」であるというが，唐［1986］では実際には総計31姓に及ぶことが指摘されている。十二姓以外の姓として，たとえば斗江郷の梁姓は，宋代に山東梁山県を離れ，５代目に王安石の変法に連座して湖南省会同県・靖県に流された。明代嘉靖年間，梁国基のときに広西の宜山へ「征蛮」軍を率いてきた。後にその子孫梁采富が古宜鎮灘頭に来住し三江に住み着くようになった（1997年８月，斗江鎮斗江村梁Ｔ氏（68）への聞き取り）。

梁姓の来歴には異説もある。県図書館所蔵の光緒年間に編纂された『梁氏族譜』では，始祖は江蘇から予章の九江徳化県に移った。成化年間に徳化から広西慶遠南丹州に移住した。万暦二年に「苗蛮」が反乱を起こし，「逆匪」が「入寇」し，「柳州各属」を「浸擾」した。始祖梁公褒は「苗」を大挙征伐し，「撫蛮将軍」に勅封され斗江寨尾に住み着いたことが記されている。さらに，斗江郷下古生屯では，梁姓が「広東珠知巷」から南丹慶遠府を経て古宜に来たという伝承があって，珠璣巷伝承が追加されている。明末に来住したゆえ，明初にはすでに三江古宜に住み着いていた上記の十二姓からは遅れて六甲人に加わったことになる。いずれにせよ宜山（慶遠）・南丹という地名や「征蛮」の故事からは，壮族の影響を受けていることが明白で，民国『三江県志』「僮人」でも斗江の壮族が「数百年前」に南丹慶遠から来住したことが明記されている。移住時期について三江県民委（編）［1989］では，先述のように，400年近く前に慶遠から斗江に移住したというから，おおよそ明代の16・17世紀の交の頃であろう。

なお，斗江鎮下古生屯では六甲人の民族成分は「壮族」である。下古生屯梁Ｘ氏（2015年当時78歳）によると，祖先が南丹・慶遠府から移住したがゆえに民族は壮族である。しかし，風俗習慣は六甲人のそれであり，壮族であっても壮語を解さず，日常会話は六甲語である[8)]。同楽苗族郷高武村の六甲人は古宜に来てから侗族地区に再移住したものであるが，民族成分の上からは「侗族」である。この場合，古宜付近から再移住して70代の老人の世代ですでに13代が経過しており，六甲人としての自己意識を持つが言語や習俗はかなり侗族のそれになっている。双方の場合とも，民族成分の如何に関わらず，

「六甲人」であるという明確な自己意識を持っている。

このように六甲人は古宜鎮一帯を中心に居住しているが，なかには斗江鎮や同楽郷のように壮族や侗族地域に再移住をし，同楽郷のように周囲の侗族の影響を受けて侗族になったものも見られることが指摘されよう。この点は唐［1986］を含む従来の研究では注意が払われてこなかった。

姓に関する意識は強く，同姓内での婚姻は避けられ，また姓ごとに年中行事がある。たとえば曹姓は５月14日，侯姓は５月15日，王姓は５月５日，黄姓は５月14日，栄姓は６月６日である（何れも旧暦）。姓ごとの行事といっても，現在は特段の内容はなく，食事をともにするだけであるが，姓ごとの結びつきの存在とその強さに注意しておきたい。なお，曹姓はどこに居住していても「牛肉食の禁忌」を有する[9)]。この点について，『曹氏宗志』（2011）では，曹姓の始遷祖曹槐公が福建で倭寇との戦闘中に河畔に追い詰められて牛尾にすがって渡河し難を免れたという故事を挙げて，今後牛肉を食べないこと，もし食べたら「牛皮瘡」に罹るだろうという誓いを立てた記事がある。

こうした六甲人の習俗はどのようであるのか，その自己意識が習俗にどのように現れているのか，次に具体的に検討して行こう。

3　風俗習慣

3.1　居住・生業・飲食

唐［1986］によると，六甲人のもと古宜区における村落として，潯江とその支流の３つの河川の両岸に大小47寨が集中して立地し，家々が密集する。その家屋は人民共和国成立以前は「地底屋」と呼ばれる平屋が主体であったが，人民共和国成立後に，２層に人が住み，１層に家畜を飼養する「楼屋」に変化したという。民国『三江県志』２社会「居処」では，地面に就いて建造し，瓦を多く葺くが「矮小黒暗」であること，庁堂の背後にイロリを切って炊事をするので煙が家屋中に膨満することが記されており，民国期にはまだ平屋の段階であった。この点について，1930年代末，1938，1939年ごろに高床式になり始めたという言説がある（1990年，大寨屯曹Ｊ氏）。平屋から楼屋への移行の要因について，人民共和国以前の住居は１層だったが，富裕な人は高床式で瓦屋根の住居だった。人民共和国成立後，高床式のほうが「生活がよく便利」ゆえに変えたという（2003年，甘洞村栄Ｃ氏）。1945年以降，「高床式住居は富裕の証しであり，平屋では嫁が来なかった」ので楼屋を建てたという言説もある（2003年，程村郷頭坪村曹Ｃ氏（70））。裕福な若者が楼屋を好んだことから楼屋に変わった（2015年，古宜鎮光輝村寨更屯）という言説もある。もっとも壮族や侗族地域に早期に移住した者は早くから楼屋に変わっている。

変化の時期については概ね人民共和国成立の前後であるが，変化の要因は様々である。

街上の漢族との差異化や侗族の影響という言説は聞かれない[10]ので，説得的な理由は不明である。ただし，「流行」の持つ影響力について，近年，沿海部への出稼ぎの流行にともない広西において高床式住居が急速に減少し，コンクリートブロックの家屋に新築する動きが至る所で生じていることを考え合わせると，流行し始めるとその力を止め難いものがあり，いったん高床式住居が流行するとその傾向が止まらなかったことは容易に想像がつく。

生業は農業主体で，唐［1986］によると，かつてはとくに「禾把米」と呼ぶ1期作のウルチ米を好んで植えた（その作付面積が4分の3を占めたという）。ウルチ米は当時他民族はほとんど植えなかったという。その点で粘米を主とする漢人やモチ米を主とする侗族・壮族・瑶族（紅瑤）と違いが見られた。しかし，1958年以降，粘米，モチ米が主体となり，ウルチ米は非常に少なくなった。1953年以降，食べるのに不十分なため2期作が可能な粘米に変わった（光輝村寨更屯栄H氏）とも言われる。これらの背景に，人民公社成立など集団化にともない，苦しい生活を強いられるようになった農村の事情

写真1　1990年の大寨屯（1990年5月，筆者撮影）。

写真2　2016年の大寨屯。古宜鎮ではかつての高床式住居がコンクリートブロックの家に変化している（2016年6月，筆者撮影）。

写真 3　魚のナレズシ（2015年 8 月，程村郷泗里村，筆者撮影）。

が容易に考えられる。ただし，現在でも六甲人はモチ米を食べるのを好み，オコワやモチが親戚友人を訪問するときの礼物となる［三江県民委（編）1989］など漢人とは異なっている。

農作業に際しては男女の分業が明確で，人民共和国成立前，男は田植えをせず女は犁を使う田起しをしなかったという。とくに犁を用いての田起こしは重労働である。（侗族化した地域を除いて）男女分業という点で侗族とは異なるという言説が各地で聞かれた。飲食面での特徴はモチ米食品を好み，年中行事の度に行事食としてモチ米食品を食べた点，侗族のように油茶や魚・肉のナレズシ（酸魚・酸肉）を好む点である。ただしナレズシの作り方には侗族とは相違がある。六甲人はイロリの煙でいぶしてから漬けるが，侗族は直接漬ける（光輝村寨更屯栄Ｈ氏）。漬ける時間も，六甲人は２，３個月間程度であるのが侗族のほうはそれよりも長期にわたるという。六甲人は「熟したものを食べる」ので，「生食」を好む侗族と違うという言説もある（2016年光輝村馬湾屯謝Ｑ氏(78)）。ナレズシは，六甲人にとっても平常時のみならず婚葬儀礼や客人の接待の際に必要不可欠である。

3.2　婚姻習俗

婚姻習俗における顕著な特徴は，歌掛けを通じた男女間の恋愛，婚後の不落夫家である。

唐［1986］によると，六甲人は唱歌を好む。歌詞は自分で作る。「大声歌」と「細声歌」の違いがある。「細声歌」は，男女が恋愛の際に歌う情歌で，「大声歌」はそれ以外の歌，たとえば春節・清明節前後の時期に多く行われる小説故事に題材をとったものなどで，娯楽として歌われる[11)]。歌う際には必ず偶数の人数で歌うこと，同姓者の間では歌わないことが挙げられる。細声歌を歌い恋愛をする場合でも，人民共和国成立前は「父母の命，媒酌の言」に従う必要があったので当事者が自由に婚約をすることはできなかった。斗江鎮下古生屯でも，人民共和国成立前は「紹介婚」のみで恋愛婚は蔑視された

という。光輝村馬湾屯では対歌はおもに娯楽として行われ，婚姻は以前は紹介婚が多かった。そうしなければ「老人が同意しなかった」という。

侗族地域に近いところについてみると，高武村では，侗族は唱歌を通じて結婚する場合が多かったのに対し，六甲人は以前は主に媒酌人の紹介によっていた。ただし唱歌による結婚もあって，その場合にはとくに蔑視はされなかったという。3月3日，4月8日などに侗語で唱歌をした。とくに4月8日のそれは男女老幼が山へ行き昼夜を通して唱歌をしたという。8月15日の中秋節には男女が月を見て歌ったという。ただし，ここでも同姓者同士は歌うことができなかった（侯H氏（71））。

六甲人の場合，侗族や壮族と違って，同姓者の場合は歌うことが許されないので，歌う際には先に相手の村名と姓氏を聞いた。同姓婚は禁止されており，五服以内の場合，歌掛けもできないし当然婚姻も不可能であった[12)]。

なお，六甲人は歴代，他民族との通婚をしないとされてきた。ただし，現在，高武村などでは六甲人以外の侗族との通婚や，斗江鎮下古生屯などでは壮族との通婚が行われるようになっている。

不落夫家について，夫家に嫁いだその翌日に花嫁が，婚礼の際に彼女に随伴して来た未婚の女性たちとともに実家に戻った。夫と別居する最初の一年は，春社，田植え，収穫，茶葉の選別といった機会に夫方に戻り数晩泊まる。2年目は夫家へ行く回数が次第に増える。3年目は基本的に夫家に常住する。唐［1986］は，その原因として，早婚，嫁の実家における綿花等の畑の労働を挙げている[13)]。斗江鎮甘洞村でも最低2年経つと夫家に戻ることができたというが，他方で，「三年新嫂（六甲話ではサンニン・センソウ）」として，かつては3年以内に花嫁が夫家に定住したら「不正常」として蔑視されたという（2003年，栄C氏（68））。この点は侗族地域により近い高武村で顕著で，3年以内は妊娠することができず，人民共和国成立前は3年以内は正式な結婚には数えられなかったという。しかし実際には，たとえば古宜鎮大寨屯の曹J氏（2003年，80歳）によると，3年間は夫家に戻ることができないのだが，しかし3年以内に妊娠して夫家に帰っても他人の批判は受けず，大多数は2年で帰ったといい，原則と実質が異なっていた。光輝村寨更屯では1年あるいは2，3年別居し，まだ妊娠する前に夫家へ帰ったという。程村郷泗里村でも，2年目になれば妊娠していなくとも夫家に常住することが可能で，この点は人民共和国成立以前も同様であったという。非漢族的な慣習を連想させる不落夫家は，六甲人のもとではそれが存したにせよ，非漢族のそれほど厳格に遵守されていなかった（あるいはそのように変化した）ことが推測される[14)]。

年齢集団トンバン（ドントイ，ホーバン：いずれも六甲話）について，唐［1986］は，結婚の数日前にトンバンの女性たちが夜に新婦の家に集まり，唱歌をする（「伴女歌」という）。嫁出の際に4人が「送姨妹」として新婦を送る行列に加わる。この点について，程村郷泗里村では，結婚前に新婦の家でトンバン5，6人を呼んでともに夕食を取り，

食後に一緒に歌った。トンバンは新婦の房族の女性たちと夜半まで新婦の親元を離れる苦悩を表現した歌を歌った。さらには新郎方から結婚前日に礼物を持参して来た若者たちと朝まで歌ったという。その後，未婚の友人 4 人が新婦を送る「送姨」として花嫁行列に加わった[15)]。

婚礼の際の侗族と六甲人との大きな違いは，三江県民委（編）［1989］によると，侗族の場合，新郎が自ら新婦の家に迎えに行くことと，花嫁行列が新郎の家に向かう時刻が夜半である点である。六甲人は新郎が自ら新婦を迎えにいかないし，新婦が夫方に行くのは通常は昼である[16)]。侗族の影響の強い高武村では，侗族式の婚礼を行う。

女性の服装について，程村郷泗里村では，黒色の上着と幅の広いズボンを着用した。「大袖大褲」，すなわち上着の袖口が寛くズボンの幅が寛かった。この他に盛装の場合，黒色エプロン，銀の腰飾り，銀のネックレスをし，既婚者は髷を結い黒白の格子柄の頭巾を巻いたという（上着あるいはズボンの色は青色だったという地域もある）。

この点，侗族の影響を受けた高武村では，人民共和国以前，黒色の襞の多いスカートを着用した。六甲人の服装の特徴として女性はスカートを着用しない点で侗族とは違うという言説が多く聞かれるが，侗族の影響が強い同楽郷の六甲人は事情が異なっており，この点，従来の研究では注目されてこなかった。この他に刺繍を施した靴「尖頭繍花鞋」，腕輪，イヤリング，ネックレスをした[17)]。六甲人は刺繍に長けており，エプロンや靴に刺繍をほどこした［唐 1986］。初生児が生まれたら貧富に関わらずすべて「三朝（サンジウ）酒」を行う。三朝酒の祝いでは双方の女性がもっぱら活動し男性は基本的に参加

写真 4　六甲人の女性が「六甲歌」を歌うところ（2003年11月，斗江鎮甘洞村，筆者撮影）。

しない。侗族の影響の強い高武村では三朝酒に新婦側の男性も来るというが，通常は嫁方は女性のみが来る。贈り物は，鶏・豚肉等の食品，子供の背負い帯である。

このように，歌掛け，不落夫家，年齢集団の習俗において，漢族のそれよりは非漢族のそれに近いものがあった。女性の服装においても独自性が見られた。ただし，侗族の影響の強い地域では侗族の習俗の受容が見られた。

3.3 年中行事

唐［1986］によると，春節「過大年」について，六甲人は12月29日（旧暦：以下同様）に始める。30日夜は「守夜」として家人がイロリを囲んで老人からの伝承を聞く。1990年５月の調査によると，年越しは12月29日から始まり，初一は喫斎をする。寨更・下古生・馬湾では，正月に備えてモチをつく。４月８日に黒色のオコワを作り，牛を１日休息させる。７月14日（中元節）について，侯姓は過ごさないが客を招待して食事をする。栄姓や曹姓の一部にもない[18)]。下古生屯の梁姓は，おそらく壮族の影響が考えられるが，７月14日の「鬼節」は春節よりも大きな行事として重視され，ニワトリ・アヒル・豚肉などの供物を捧げて祖先を拝むという。なお，古宜一帯の数十の村落では，農暦３月３日に二聖侯王を盛大に祀る[19)]。

先述のように姓氏ごとに大節がある。ただし下古生屯では梁姓だけの行事はないという。

かつて７年に一度の敬神活動「十月神」が行われた。人民共和国成立後になくなったというが，その内容は農暦10月のうちに１日を選んで客を招待し，豚「神猪」２頭を殺して盛大な宴会を催す。３，５戸～７，８戸ごとに毎年交代で行ったという[20)]。

他は他民族とおおむね同じで，春社，清明，４月８，端午[21)]，秋社，中秋である。三江県民委（編）［1989］によると，春社・秋社は六甲人が比較的重視する行事で，モチをつくり，ニワトリやアヒルを殺す[22)]。正月や社節のモチにせよ４月８日のオコワにせよ，先述のように六甲人にモチ米を好む習俗が見られることが注目される。

唐［1986］によると，六甲人には過去に蘆笙を吹く習俗があった。寨更屯では，栄H氏の父・祖父の時代にあったが1949年以降になくなった。もっぱら吹くだけで踊らない。高武村では，年中行事の際に男性が吹いた。踊りは伴わない。馬湾屯では，人民共和国成立前にすでに吹かなくなっていた。中央民族学院1984年級文学研究生調査組（編）［1986］によると，清末民国初にはまだ蘆笙を吹く習俗があった。その吹き方は侗族と同じだった。春節に主となる村寨が客となる村寨の蘆笙演奏者を招き酒肉をふるまった。時期は収穫後に穀物を倉に入れてから翌年の春耕までの間である。春節はその高潮期である。自分では制作できなかったので多くは瑤族から購入した。１回の村寨の訪問で，謝礼としてのもてなしに多額の酒肉を要するので次第に吹かなくなった。蘆笙は六甲人の寨のみで吹き，他族とともには吹かなかったいという。これらの蘆笙をかつて吹いたのは調査による限りでは侗族地域に近いところであり，六甲人が来住後に侗族の影響を

受けたことが容易に推測される。

4　六甲人のアイデンティティー

六甲人は一般の漢族よりも早期に入植し，その習俗にも漢族と異なる部分が見られた。婚姻の際の歌掛けや行事の際のモチ米食品，蘆笙，ナレズシ，女性の服装などの諸般にわたって顕著であるが，そうした漢族と異なる点が漢族からかつて差異視されることになった。冒頭に挙げた費［1980］は，そうした差異視されたことからみずからを「六甲族」として承認されるよう申請した経緯を指摘している。黄（主編）［1995］によると，かつて漢族から「六甲佬」・「六甲仔」・「大爺佬」（阿呆）などと呼ばれ蔑視を受けたことが指摘されている。街上の漢族からは「郷下人」（田舎者）として蔑視されたという。

ただし民国期には当時の大漢族主義的な風潮のもとに六甲人にも漢族意識が見られた。民国『三江県志』２社会，民族「姓氏」には，「按六甲漢人也。中屈於夷，復帰於夏，其風俗当自易斉一於漢俗」とある。すなわち，六甲人は「漢人」であって，定住後に「夷」の影響を受け自ら「屈して夷に甘んじていた」ものの，後に「夏（中華）」に「復帰」し漢俗と習俗が同じになったという。こうした記事が生まれる背景には漢人から往々「夷」として差別された事情が存していたであろうこと，そうしたなかで民国期に「漢人」としての自己主張をする意識が一部の幹部の間で強まったであろうことが推測される。民国『三江県志』「姓氏」によると，漢人の中で潯江流域を開拓した曹姓や栄姓などの十二姓は，明代中期に「衣冠文物」が「一時之盛」を「極め」ており，旧県志の編纂者の廖蔚文によると，古宜の曹姓・栄姓が晋の王・謝，唐の崔・盧のようであったといい，六甲人が古代中世の名門貴族のようであったことを指摘している。旧県志が編纂された明代中期には科挙に応試して文人士大夫になるものが多かったであろうことが想像される。こうした記事も六甲人漢人説を補強するものであったであろう。

とはいえ，言語や習俗に見られるように，六甲人の多くは自文化の特徴を堅持して，漢人とも一線を画してきた。そのことが背景となって1952年に「六甲族」と申告することになる。

唐志宗氏への聞き取り（1990年６月２日）によると，人民共和国成立以降，三江県政府では六甲人の幹部が多く，彼らは自らを六甲族と考えていた。過去に漢族は六甲人を少数民族として扱ってきた。そして1952年，六甲人は自ら少数民族として認定してほしいと中央に願い出たが批准されなかった[23)]。1950年代に六甲人が県政府の幹部を占めていたという言説は各地で聞かれる[24)]。侯［2003］によると，人口上弱勢な集団が長期にわたって移住をし自集団の特徴をも保ちつつ他集団と接触してきた特殊な歴史が，凝集力が強く，他集団と違う集団を形成せしめた。それゆえ彼らは「六甲族」として申告したという。

結局，この申請は政府に却下されることになるが，六甲人の同族意識の強さは現在にまで維持されている。斗江鎮下古生村に移住した六甲人は「民族成分」のうえでは壮族になっている。壮族といっても，言語や習俗は六甲人のそれである[25)]。また同楽苗族郷に移住した六甲人の場合，習俗はほとんど侗族化している。六甲語はほとんど失われ，日常の言語は侗語になっているが，それでも「六甲の地から来た」「六甲人」であるという意識は強い。民族識別工作の際に上から決められた「民族成分」のうえでいかなる民族になっていても，彼ら六甲人に共通するのは，自らを六甲人であるとみなす「六甲人意識」の強さであると言うことができる。そうした意識はとくに移住史，言語，独自の習俗などの歴史や歴史上形成されてきた文化に基づいている。六甲人は非漢族と漢族との間を揺れ動きながらも，自らの歴史・文化を維持することで同族意識を堅持してきたものと考えられる。

5 おわりに

本稿で検討したことを整理する。まず，移住史について，（姓氏によって移住時期・経路が多少異なるが）六甲人は少なくとも明代までに福建や湖南等から現在の三江県に来住し，古宜鎮付近に集住し，清代乾隆年間までに他から「六甲人」と称されるようになった。ついで，六甲人は人口が少ない弱小集団であるが，その言語は平話に属し粤語と「土拐話」の中間にあって「独立性」が強い。壮族や侗族の居住地に近いところにも入植したゆえ，それらの地域では，風俗習慣において壮族や侗族の影響を受容した。住居・生業・飲食・婚姻・年中行事等の習俗においては，独自性を維持しながらも，部分的には地域によって壮族や侗族の影響を受けた。民国期など漢人化した時期も見られたが，六甲人の同族としての意識，凝集力が維持されてきた。そうした意識は歴史や文化に基づいている。

侗族地域に再移住をして侗族の影響を受容し「侗族になった」六甲人の事例は稿を改めて検討することとするが，国家の政策によって新たに生まれた「民族成分」とは別個に，より基層の部分に，よりふるい時期において形成された六甲人としての歴史・文化の記憶が堆積しているのであり，その基層の歴史・文化を自らのアイデンティティーの維持のための資源として活用し続けてきたように考えられる。六甲人の事例は，歴史の資源化を考える際に一つの興味深い材料を提供するものである。

注

1）筆者は六甲人について，1990年５・６月，1997年７月（いずれも斗江郷の複数の村落，古宜鎮

大竹村大寨屯），2003年11月（斗江鎮甘洞村，古宜鎮大寨屯，程村郷頭坪村），2015年８月（同楽苗族郷高武村，程村郷泗里村，古宜鎮光輝村寨更屯，斗江郷扶平村下古生屯），2016年６月（同楽苗族郷七団村，古宜鎮光輝村馬湾屯）と５回短期間の調査を行った。

2）どちらの伝承がより事実に近いのかは確証がないが，唐［1986］は，金軍が福建に攻めてきてはいないことを以て後者の説に傾きがちである。ただし金の「四太子兀術」が長江を渡って攻め寄せたという伝承もある。なお，光輝村寨更屯栄Ｈ氏（調査時85歳。以下，被調査者の年齢は調査時）によると，祖先は江西・福建にいたが，江西にいたときに皇帝が六甲人の女性を見初めた。その女が別の男性のもとに嫁いだことに端を発して皇帝から被るであろう災厄を恐れて老堡郷に逃亡してきたという。

3）民国『三江県志』２民族「漢人」によると，「旧志」で「民」と称するものは皆な漢人であり，それらのうち先に荊棘を切り開き潭江を開闢したのが六甲人であるといい，漢人になかでも最も早期に三江の地に来た。なお，県志では瑶人・苗人を「土著」（先住民）として扱っている。この点，唐［1986］によると，六甲人が大寨に来て８籠の銀子で土居の瑤人からこの土地を購入した。それゆえに古宜大寨を「八藍銀子地」とも呼ぶといい，瑶族が先住民であったようである。

4）筆者が1990年６月２日に唐志宗氏に聞き取りをした際に，唐姓は洪武13年（1380），融水から老堡へきて住んだ「三甲」民であるという指摘を受けた。

5）1990年６月２日の唐氏への聞き取りでは，六甲語は福建では全く通じない，おそらく福建に住んだ時間は短いゆえであろうということであった。なお，侯［2003］では，言語からは福建や広東からの移住は考証し難いという。

6）1949年以前，六甲人はその地を離れて何年経っても帰郷すれば六甲話を話したこと，またそうせねば宗族や近隣の罵言を受けたこと，さらに長安（融安）の商店で数年働いた者が帰郷して，粤語を話したところ，殴打されて祠堂への入場を断られたという事例がある。

7）現在では六甲人に漢語を解する者が多いが，かつては漢語を話す者は外界と交流のある幹部・学生・商人を除いては非常に少なく，1949年以前は20％ほどに過ぎなかったという言説がある。

8）1997年８月の斗江鎮での聞き取りによると，自治区の政策として1984，85年以前はその集団の移住史がわかれば民族成分の変更が可能であったが，それ以降は大量の集団での族籍変更はできなくなったという。斗江鎮付近における六甲人を含む諸民族の関係や政策の影響については塚田［2001］を参照されたい。

9）同楽郷のある村では，今は若者は牛肉を食べるが，50歳以上の者は食べない。他処から嫁入りした女性も六甲人になったゆえ食べられなかったという。

10）程村郷泗里村では，1962年以降に大きな木板楼に変わったが，牛や豚など家畜は「侗と違って」家内で飼養せず，蓄舎を別に建てたという（曹Ｍ氏（51））。ただし，下古生屯等では現在も１層部分に家畜を飼養しているので地域による相違がある。

11）唐［1986］によると，男女間の社交や娯楽の「大声歌」の終了後に，男女双方が「相款」（男女恋愛）の期日・地点・人数（男女同数）を決める。これを「講日」と呼ぶ。その日時になると，「款妹」（女性からみると「款弟」）は同伴者を誘い決めた地点に行き相手と会い，そして情歌を歌ったという。最初は男女の同伴（3–4人）が一緒に歌うが，歌うにつれて各人の対象「款」が次第に確定する。その対象と礼物を交換し，それぞれが対象を連れて別のところへ行き単独で「談款」の歌を歌ったという。

「大声歌」の歌掛けの会期として，古宜，富禄では旧暦３月３日，斗江は２月15日に行われた。なお，中央民族学院1984年級文学研究生調査組（編）［1986］によると，歌掛け，とくに情歌

には既婚者も参加が可能であった。しかしその女性は紛糾発生を回避するため家長，兄弟，同宗者を避けて夫に見つからないようにしたという。既婚者とは不落夫家期間中で子供のいない新婦を指すと思われる。

12）斗江鎮甘洞村では，現在は同姓でも５代以外なら政府は婚姻を許可するが，しかし実際には現地では同姓不婚の慣行が維持されていた。寨更屯でも，同姓不婚の原則は厳しく，５代以外でも婚姻が不可能であった。斗江鎮下古生屯では本屯以外の他村の同姓ならば婚姻は可能であった。

13）こうした習俗と不落夫家との間には因果関係はないことはすでに塚田［1999］が検証している。

14）別居期間中の嫁の夫家へ行く時期として，寨更屯では，夫家から兄嫁が迎えに来て春社，田植え，収穫に夫家に戻った。ただしその時期，夫とは一緒に過ごせなかった。馬湾屯では，４月の綿花の種まきをするときに戻った。田植えや収穫には必要があれば嫁を呼んだという。その際に新婦の友人のトンバンたちが随行し夫方での１晩を一緒に過ごした。斗江鎮甘洞村では，田植え・収穫時に豚肉・酒・大きなモチを持参して夫家へ行ったという。くわえて別居期間中でも夫家に婚葬儀礼があった場合には花嫁も参加した。

15）花嫁を送る「送親人」のうち送姨は未婚女性４人だが，嫁方の男性が多く花嫁を送った。その数は「六十外公百二舅」として人数が多いほど花嫁を重んじるので良いとされたという言説がある。

16）唐［1986］によると，六甲人は花嫁が自宅を出発する「出門」の際に兄が嫁を背負い籠に乗せ（兄がいない場合は族兄が代わって務めをする），別の兄弟が花嫁のために傘をさしたという。侗族の場合は通常，花嫁は歩行して嫁いだ。また，唐（1986）によると，六甲人には拝堂や合巹酒の習俗はなかったという（程村郷泗里村では富裕な者は拝堂をしたという）。

17）唐［1986］によると，清代はネックレス，ブレスレット，イヤリングは白銀製であったが，1930年以降，玉製に変化したという。

18）甘洞村では，福建から広東に来た時に広東韶関の人々が十二姓に居住を拒み戦争になった。とくに栄姓に死者が多く出たため７月14日は過ごさないという。

19）民国『三江県志』２社会，風俗「迷信」によると，南明・永暦帝が功を以て封贈した藍氏兄弟を指す。三江侗族自治県志編纂委員会（編）（1992）によると，藍氏兄弟はその乗船が転覆して水死したが，巨大な神鯉になって民を守り，永暦帝の船を沈没の危機から守るなど霊験を顕したという。

20）十月祭は，５年に１度で，ブタ２頭，雄鶏８羽・雌鶏１羽・アヒル２羽を殺して盛大に行われたという言説もある。民国『三江県志』２社会，迷信「民主相公」によると，「六甲人供奉於香火堂，三年或七年，必於廃暦之十月宰牲祀之，集親大嚼。名為十月神。」とあり，ここでは３年毎か７年毎とされている。

21）三江県民委（編）［1989］によると，六甲人は端午節を「駆邪除病」の日と見なし，大掃除をしてから山里・川辺に行き草薬を採取し，ニンニクとともにそれらを細く切って雄黄酒に混ぜて家の前後に撒いたという。なお，漢族は元宵節を過ごすが六甲人は過ごさない。

22）大寨屯曹Ｊ氏によると，かつて春秋社節のときに豚を殺して祖先祭祀をした。威信のある人２，３人が主催をしたという。社節には「会首」３人程度を選び「社田」を管理し，とれた糧食を売って供え物を購入した。今は各家で豚肉を買って過ごす。

23）かつて六甲人の「群衆」は自分が六甲人であることを知るだけで，漢族であるという認識は全くなかったこと，幹部でさえも民族成分を自己申告する際に「六甲」の２文字を書く者がいたこと，後に漢族だと他人に指摘されるとそれを笑い飛ばす者がいたことが伝えられている。こ

うしたことを考え合わせると，民国期に漢族になるべく志向した幹部は限られていたであろうことが想像される。

24）三江県民委（編）［1989］では，とくに六甲人とは明記はしていないが，建国前の県内の高学歴者の多くが漢族であったことを示している。馬湾屯謝M氏によると，人民共和国成立以前は政府の官員は全て漢族であったが，とりわけ1958年以前は六甲人が官になった。当時はトン族は学校教育を受けたものが少なかったという。この点について，民国『三江県志』2社会，戸口，人口密度「附表」によると，1945年当時，全県人口142,432人のうち初等教育以上の教育を受けた人口が10,340人に過ぎなかった。

25）もっとも斗江鎮の場合，前稿［塚田 2001］で指摘したように，鎮の中心であり鎮政府所在地の斗江村および一帯の地域は六甲人の影響が強く，侗族や壮族も六甲話を話す。

参照文献

中央民族学院1984年級文学研究生調査組（編）
1986 『六甲人歴史・文学・語言調査』北京：中央民族学院。
費孝通
1980 「関於我国民族的識別問題」『中国社会科学』1980(1)：147-162。
黄光学（主編）
1995 『中国的民族識別』北京：民族出版社。
侯井榕
2003 「従語言探討三江六甲人的族源」『広西民族研究』2003(1)：81-88。
三江侗族自治県志編纂委員会（編）
1992 『三江侗族自治県志』北京：中央民族学院出版社。
三江県民委（編）
1989 『三江侗族自治県民族誌』南寧：広西人民出版社。
唐志宗
1986 「六甲人」『三江県志通訊』1986(1)：23-40。
塚田誠之
1999 「壮族の婚姻習俗『不落夫家』に関する史的考察――一九四九年以前の広西を中心として」『中国21』6：143-174。
2001 「民族とその文化における国家政策・民族間関係の影響に関する一事例――広西北部三江侗族自治県斗江郷の場合」横山廣子（編）『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）pp. 145-160，大阪：国立民族学博物館。